

学会のすそ野を広げるための一私見

山 中 大 学*

本誌6月号の東大・増田君の意見(『天気』, 32, 48)に関連して若干のコメントをさせて頂きたく存じます。同君の「購読会員制度」並びに『気象研究ノート』拡充は良い意見であると認めつつそれらの現実的問題を指摘させて頂き、私見として『気象研究ノート』の『天気』への統合^④を述べ、さらに「関連諸分野の研究者の正会員加入促進」を考えてみたいと思います。

『天気』の果たすべき役割としては、①純然たる機関誌的側面、他に、②邦文論文誌、③情報交換誌、④解説・総合報告、⑤「啓蒙」(私自身はこの語は好みませんが)的側面、が挙げられると思います。増田君の意見では、主として④⑤の充実により『天気』購読者=会員を増やすということのようです。確かに日本人(邦文出版物には常にこの nationality による制約があります)の一般的知的水準・科学的好奇心は近年顕著に増進し、また気象研究・気象事業が国民の税金で賄われていることに対する還元義務からも、⑤は重要であり需要の高いものでしょう。しかしながら、知識の先端到達度・科学的探究意欲・お互いの面白味への共感という意味では、現状は昔の intelligentsia や élite 達の閉鎖的 society の時代より低下したと言わないまでも薄くなってきていることも事実です。一方、気象学研究者・気象事業従事者が応用させてもらう形で接してきた純粋物理学・化学・生物学等の分野に対し、既に我々は新しい問題とその解決法を提供すべき(できる)立場にあり、それらの分野の研究者にもまた細分化した我々自身にとっても良い④の需要は高まっています。しかし『気象研究ノート』との役割分担が、特に現状の学会財政を考えると、非合理的あるいは不可能になると思われれます。

このように考えると④⑤を一つの雑誌で満たすこと、従ってそれによって会員数を増やすことは現実的に無理であると考えられます。⑤のみの充実については、例えば最近の『自然』(中央公論社)の休刊に見ごとく容

易でなく、また天文学・地質学等に比べ(一個人の知識習熟度や能力でなく対象の広がりや既知度による新発見の困難さのため)アマチュアの貢献度の低いこと、かつ「学会」が本質的に言わば命賭けの探究心を持つ者の新成果を促進すべき団体であること等を考えると、少なくとも私自身は全面的賛成はしかねます。他方④を充実するならば、既に saturate した気象学研究機関・気象官署の会員に加えて、多くの関連分野の研究者・職員を迎え入れることができます。もし『気象研究ノート』を廃刊することで『天気』の④が充実するならばそうしてよいと思い、その場合は連載形式の採用や好評のものは合刷して別途出版するなどを考えればよいと思います。その方が書き手の負担や売れゆきの分散も抑えられるとも考えます。良い④が『天気』に次々と掲載され、各種の学際集會等で会員により引用され紹介されてゆけば、他分野の人々を必然的に気象学会に向けさせることができるでしょう。その結果もし『気象集誌』が既存の気象学研究機関・官署の構成員以外の人々の論文で占有されたとしても、真に気象学・大気科学の前進につながるものであればそれを拒むべき理由は本来ないはずで

以上述べてきましたことは、決して学会の(研究者と呼ばれる人々への)閉鎖性を指向するものではありません。気象学・大気科学は医学と似て、その言わば臨床面の充実が研究の発展・人類への貢献に不可欠な意義を持っています。学会の国際的レベル到達とともに『天気』における②の比率は小さくなることは仕方の無いことですが、『気象集誌』論文では割愛されやすい vivid な現業からの情報、詳細な観測技術・解析手法の up-to-date な紹介等の重要性は②か③かの分類にこだわらず高まることはあっても低下することはないと考えています。そういう意味で「購読会員制」の場合、形式的会員増により一部正会員があぐらをかくという不遜の風が助長されはしないかという、いささかの危惧があります。古来多くの偉大な科学者がその志の端緒を身近な大気現象への疑問やそれに対する教育機関での説明への感動に発した(以下434頁へ続く)

* Manabu D. Yamanaka, 名古屋大学 水圏科学研究所(日本学術振興会奨励研究員)。

世界の異常天候とその影響評価 (17) (Climate Impact Assessment, June, 1985)

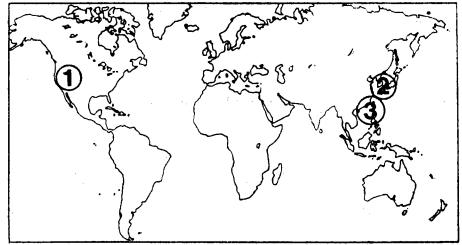
1. 合衆国西部—干ばつ

西海岸とロッキー山脈北部では干ばつのため農作物が被害を受け、火事の危険が高まっている。7月初めまでに、カリフォルニアでは、8万ヘクタール(20万エーカー)以上の地域が火災を受けた。ロサンゼルスでは、1月1日以来の降水量は僅か89mmであり、平年値の42%である。モンタナ州では、1月1日以来の降水量は58mmにしかならず、小麦の3分の2はかなりの育成不良の状態にある。

カナダのプレーリーでも、干天のため農作物が被害を受けた。

2. 韓国・日本—大雨, 洪水

韓国南部と西日本では、梅雨前線による大雨のために洪水が発生した。6月21日～29日に、これらの地域では200mmを越える雨が降り、いくつかの地点では600～700mmの雨が降った。



3. フィリピン・中国—台風

6月21日に、台風 Hal (5号) は、最大風速90ノット(約45m/秒)、最大瞬間風速110ノット(約55m/秒)の強風を伴ってフィリピン北岸をかすめて通過し、24日には中国の南岸を襲った。このためこれらの地域では、強風による被害と洪水が発生した。

ルソン島では、数日後に台風 Irma (6号) の大雨の影響を受け、洪水は広範囲に広がった。マニラの近くの Cubi Point では、月降水量が1,400mmを越えた。

注：上記各項目の番号は図中の番号に対応している。
(気象変動対策室 真野裕三)

会員へのお知らせ*

山元龍三郎会員より昭和60年4月「国際学術交流に使用する目的」で御寄付戴きましたので報告いたします。

* 本欄は、日本気象学会理事会・常任理事会が会員への周知を図るため、必要と思われる情報を適宜掲載するものです。

(418頁より続く)

と聞きますが、中途半端な⑤がそのような教育現場に貢献することは決してないと信じています。あらゆる人々にとって苟も学会たるものはその時のその学問の発展の最先端であってこそ意味のあるもので、その意味で既存

の枠に捉われない capacity を気象学会は今求められているように思えます。「学会のための学会」となることのないよう念じつつ、役員の方々の日々の御苦心を承知しました上で、奮勇を奮って乱筆を認めさせて頂きました(1985年7月8日記)。